

(5) 若松児童ホーム関係者のオーラルヒストリー (一)

語り手：中島哲郎（現・若松児童ホーム施設長）

1951 年 2 月 7 日生

古谷俊雄（現・若松児童ホーム保育士）

1951 年 8 月 3 日生

中井陽子（元・若松児童ホーム保育士）

1935 年 7 月 17 日生

道上みどり（現・若松児童ホーム栄養士）

1957 年 1 月 26 日生

聞き手：田上繁、森武麿、安田常雄

安室知、若宮幸一、松本和樹

聞き取り日：2012 年 8 月 7 日

場 所：若松児童ホーム（若松区大池町）

海上生活という表現

中島： そういうものが、差別的な言葉が出てきて、海上生活者というのはね、名前使わなくなったですよ。本質的に。

安室： そうか、そういういい方自体が海上生活者。

中島： 海上生活者で差別している訳じゃないんです。これが、俺たちは貧乏だからだと、海上生活する [] そうじゃないかと [] いざこざ []。

安室： 戦後の名前を改称する海員児童寄宿舎から児童ホームにしたのも、そういうあれがあったんですかね。

中島： そうかも知れませんね。

安田： そうですね。だから、昭和初めぐらいだと、僕は東京なんですけども、東京だとね、水上生活者という一つの名称、水の上、水上生活者という人たちが、東京結構川がいっぱいあったんですよ。今みんな道路になっちゃったけども。あすこね、結構掘り割りみたいな川がいっぱいあって、そこにね、ずいぶん船が停まっていて、今でいう歌舞伎座の近所のところなんかもそうで、あそこにも何軒も船で暮らしている。

中島： 船で暮らしている人いますよね。

安田： うん。少なくともね、この昭和 30 年ぐら

いはまだいたんですよ。で、そんなときはたいてい水上生活者という言葉、それから、当時の東京都の社会局がいろんな調査をやっていますんで、そこでは大体ね、水上生活者の生活なんとか、かんとかという、そういうリポートを出したりしてるんですね。

中島： 北九州の場合、なんていうかな。そういう水上生活をなくしていこうという、なくすから、例えば、だから、この外したんですね。その当時ですね。

児童ホームの創設

森： 海上というこのいい方、海上生活者ということ、今、船上といういい方をされている。

中井： はい。

森： 前は水上生活ていつてる。

中井： 水上といいますね。

森： こちらでは、船上でいい方は。

中井： 海上ですね。はい。

森： 海上ですか。

中井： はい。海上の方がよくいいますね。結局、この施設ができたちゅうのは、船でお父さんたちが出て行くでしょう。船に乗って、石炭を積んだあと、そのときに、子供がね、遊ぶらしんですよ、小さい船の、小さい船の甲板

で、甲板でないでしょう。ほいで、暴れたりして落ち込んで死ぬ方が多かった、子供が。そんなとかね、それから学校に行けないでしょう。ずーっとどっか回っていて。そんなのを心配されて、牧野さんて方が一番始めに、市に訴えてこの施設を造ってくれたんですよ。あの方が石炭商されていた。あちらがこれを建てられた、市にお願いして。自分のもんじゃないんですよ、はい。施設を造っていただいたんですよ。

安田： 一番始めですか、それが。

中井： はい。

安田： 昭和の始めぐらいの？

中井： はい。昭和4年に。

海上生活者の事故と逞しさ

中井： 海上の生活の人がみんなね、子供が海に落ち込んだり、学校に行かれんとか、そういうのを考えられて、こういふこの施設に預けて、土曜、日曜日に帰って、ほして、船に帰るちゅう。だから、わたし来たとき何人か子供おりましたけど、「船に帰る」ちいいよったですね。「家に帰る」というよりも。船がおうちでしょ。だから、「船に帰る」て、はい。ほいで、そのやっぱりいろいろ問題があったんですよ。そのときね、双子がおりましたですね。その双子がね、頭がね、髪の毛がこ년대半分、1人あるですよ。あと全部ないんですよ。1人の子は、双子の1人ですね、全部丸はげで。そして、火傷のケドロ（ケロイド）のあれですから、つるつるでしょ、皮が。だからね、このちょっと掻いたらね、皮がむける訳ですよ。薄ーい皮でしょ。ほいで、その冬にあかぎれみたいに切れる訳ですよ。ここが血が出る訳ですよ。どうせんでも自然にね。で、わたしが赤チンとか付けてやりよった。その当時、赤チンばっかしでした。だから、みんなが、「わ

あ、頭のうしろが真っ白はげとる」て、ほして、少ししらこ、しらこみたいのが生える。火傷が固まるでしょうが。あんなんだから、赤チンが目立つんですよ、真白になって。だけど、その子は「いい、いい」て、そんな子やったですからね、おっとりした。赤チンとか付けてやりましたけれどね。その子がね、結局、船が燃えて、火事だったですね、船底が。そのときに2人の子供が這い上がって来たち、やっぱり生命力が強かったんでしょね。やっぱりまだ生きていかな使命もあったでしょう。2人が這い上がって来て、助かったんです。

森： 這い上がって。

中井： はい。でもね、ケドロ（ケロイド）で焼けて、つるつるやったですけどね、その子が小学校行くとき、帽子を被して、わたしが1年生で連れて行ったんですよ。そいで、先生がね、「あー、かわいい」、かわいいでしょうが、顔が。「かわいいね」ち、「お帽子とって」ち、いわれたんですよ。わたしがこんなふうな頭のこというてなかったもので、先生がなーもないで、先生が「お利口さんね、お帽子とって」て、室内では帽子被らんでしょうが。だから、「お帽子とって」と、子供はなにもしないにね、「はい」て帽子とったんですよ、ほしたら、そのとき、先生が「はー」って、声を出したもんですよ、先生が。小学校の先生の方が、ほだから、火傷ね、してこんなになった。ほしたら、先生がね、「ごめんね、お帽子被とってね」ちゅうてからね、子供だから、その女の子とは違って、心配はなんにもしてないんです、本人は。だけど、その子がね、いじめられよりましたね、友だちから。

田上： 男の子ですか。

中井： 男の子です。2人とも。ほいで、タコちゅう言葉をもの凄く嫌うんです。タコ。

だから、普通のね、「タコ釣った」とか、「これタコよね」とかいいよってもね、わたしとこ「先生」て来て、「どうしたん」て。「あの人がタコちゅうた」てね、「僕のことよね、タコちゅうの」。「違うよ」ちいうたんよ。「あんたタコでもなんでもないよ」て。「あんた、たかちゃんよ」て、わたしがいいよったんですけどね。でもね、タコとかつるつるしたもんばかり、嫌なんです。はい。でも、おっとりしとるからね。勉強もなかなか、成績も悪かったですよ。「勉強すかんよ」て（笑う）、逃げて回りよったですよ。中学になってね、わたしが入ったときの先生で、笹野先生てね、あの今亡くなられたんですけど、とっても立派な園長先生だったんですよ。その先生にわたしも鍛えていただいたんですけど、やかましい先生でした。日誌なんかでもちょっと変なこと、字で間違うたら、ぱっと訂正されてましたね。わたしやなんでこんな赤でこんなにいっぱい書かれるんだろうと。わたしが、まあ、学校の校が忘れたら、「学こう」とか書いとったもんでね。「そんなん駄目」て、ぱっと訂正されて、文章もちょっと違うとかね、大事なところはぱーっと線を引いてね。「ちょっと来なさい。これはどういう問題になっとるんや」とかね、もう立派な園長先生でしたけど。その先生がね、たかちゃんをよう可愛がってましたね。お父さんもお母さんも呑気な方で、ほて、ゴキブリがほうぼう出たんですよ、「ゴキブリがおるがー」って、みんながいったら、「僕だったらこぼし、船だったら []」て（笑う）。船上の子供はそんなこともやとる。船にいっぱいおるんでしょうね。船の中やからね。ほして、その笹野先生が中学に入ったとき、こんな頭じゃね、かわいそうやから、その当時カツラなんかあんまり聞いたことなかったですよ。で、「カツラ

を1つ作ろう」ちゅうて、カツラを誂えたんですよ。ほたら、1人の髪の毛がちょっとばさっとある方の子は、ちょっと色気付いて、こう鏡見て格好よくカツラ被るんですよ。で、そのたかちゃんて、タコみたいな、ほんどつるつるした子はね、忘れて学校に行きよるんですよ。「たかちゃん、カツラッ」て教えてやるんですよ。帽子のごとに被ってね、ちょこっと乗せてね、こうやって走り行きよったですよ。そんな船上の子もおりましたね。

田上： そうすると、小学校？

中井： はい。

田上： 何年、低学年？

中井： はい。小学校やけ、幼児のときから来とったから。でもね、やっぱあね、親がね、大事にね、環境がそんなでもね、親が大事に育てますでしょ。だから、子供がそんだけおっとりしてるんですよ。心に余裕があるから、泣くことないんですよ。やっぱあ、愛情かけられて、船の子でもね、親がおるから毎日一緒に生活しなくてもね、はい。親の愛情ちゅうのは大事ですね。

田上： そして、やはり、土曜日の午後ぐらいに。

中井： 親迎えに来て。船の子供は親が迎えに来て、はい、親と一緒に帰るんですよ。ほしたら、まだ、わたしは養護施設と入れ替わるときだったから、親のいない子供が何人かおるでしょう、こっちに。その子たちのやっぱあこう、指をくわえるちゅうのはあれやけど、そんな感じでやっぱあ、帰るのを見よったですね。帰ってきたら、「お父さん、明日どこかに行こうね」とかね、そんなんいうでしょ。だから、帰りたいみたいでね。でも、子供ちゅうのは本当に、養護施設の子供ちゅうのは、自分の寂しさと、それからやっぱあいろいろどう生きて行こうかちゅうの子供ながらね。将来のこともね、わたしたち分から

んですけどもね、寂しさをやっぱりこらえてね、生きていっと思うんです、今の養護さんたちもみんなね。だから、わたしたち職員はそういうところを理解してあげるとね。「こう、こう、こう、こうよ」ちゅうね、そういう指導よりもね、やっぱり心の指導ちゅうのが大事なんですよね。今、うん。だから、1人1人、段階的にね、画一的な指導じゃなくて、やっぱり、集団になると画一的な指導になるんです。「なあ、なあ」て。だけど、やっぱりそれでは、養護施設は無理ですね。「この子はこんなやから、この子は時間的にこう守らないけんけど、この子はちょっとぐらい余裕を持ってあげよう」とかね、そういうのがやっぱり家庭ですからね。そういうふうなのが施設でできるようになると、わたしもよくなるんやないかなあと思うんですよ、子供たちも少し余裕ができてね。だから、養護施設の子供ちゅうのは時間があれだから、お友だちができないんですよ。友だちと遊んでも、もう5時になったら帰らなとか、掃除だとか帰らなとか、もう、かわいそうですけどね。はい、はい。

田上： そうすると、船のほうの方は？

中井： それはないです。船は。船の方の子供はそれがあっても、土、日は帰れる。はい、親は。はい。

田上： 日曜日の夕方にまた親御さんが連れて来る。

中井： はい。

田上： で、年齢が上がってる子は1人で帰るでしょ。

中井： 帰る人もおりました。親が迎えに来られん人は、兄弟を連れて帰るとか。

田上： 小学校の上級生になると、ですよ。

中井： はい。でも、大体子供、親が迎えに来ると、わたしたちも渡さんかったですね。

田上： はー。[]のころは。

中井： はい。やっぱり、ちょっと預かっとなる子で

すからね。親から必ず電話がかかります。「今日迎えに行きます」とか、「1人で帰らせてください」とか、そういうのがないと出せません。はい、はい。

田上： わたしの義理の姉なんかも、こう1人で帰って、女の子で、中学生のときで、それでこうおらぶじゃないですか、それが聞こえないらしんですよ。で、恥ずかしいからていつて、それでとうとう「またこちらに引き返して帰って来たんよ」、とかなんとかいつて。

中井： そうですね。ようご存じでしょう、ねえ。でも楽しい面もいっぱいあったといわれようでしょう。

田上： そうですね、それは。

中井： やっぱり、普通の家庭で経験できない分もありますもんでね。キャンプなんか、普通の子供行かんですもんね。ここはキャンプから、なんかから。

田上： ただ、お三方からいろいろこういうお話聞いて来たんですけど、やっぱし、妹さんか弟さんを1人ずつ亡くされている。

中井： はい。

田上： 海に落っこって。

中井： そうですね。そんなんでね。

田上： 辛いと思いましたけどね。

中井： はい。そんなんで、牧野さんが心配されてね、やっぱあこういう施設を造っていただいたんですよ。だから、「1週間はお父さん、お母さんおらんけど、施設で勉強して頑張りなさいよ」て。でも、愛情を受けてるからみんなね、幸せな子供でしたよ。心はね、養護施設の子供の方がね……。

田上： 牧野さんていうのは、ご存じですよ。

若宮： はい。石炭もあったし、牧野海運、廻船業、船を持ってた。

中井： そうでしたよね。そう、それでこのホームが造られた。

若宮： 回漕店をやりましたね。

安田： 回漕店。

田上： 先生方ぜひ（ご質問を）。

若宮： 戦後すぐやったら、[] 上に家があったじゃないですか。

中井： 牧野さん、いや、牧野さんはあのまんまの家なんです。別荘があったようですね。

若宮： 別荘があった。

中井： 牧野とうざぶろうさんのときの時代は、よかったですね。

若宮： 火事かなんかで焼けた。

中井： はい、そうですね。石山の[]。家はそこで、前の通りでしたけど。はい。やっぱり、1代、2代、3代ちゅうのは潰れてしまいましたね。まあ、世間がよういったもんですね。

田上： 3代でね。同じクラスだったですよ、わたし、娘さんと。

中井： はい、はい。娘さんがいました。

田上： で、学芸会の練習だちゅうて、そこのうちに行ってやった記憶がありますよね。

中井： あちらだと[]を建てられた。ハシケの子供のために尽くされた方です。

森： 牧野さんてどういう方ですか。昭和4年に造った人ですか。

中井： はい。

田上： 陳情ていうか、申し入れして。

森： どういう方ですか。

中井： 石炭商されてて、はい。だから、ハシケの船を持っていたので、その子たちのこと、家族のことを心配されて、はい、はい。海に落ちて死んだりするでしょう、子供が遊びよって。どうしても船で遊ぶもんで。ちゃんばらやらしよったとき、どーっと落ちたりしよったですよ、はい。だから、結局、船が燃えたり、焼けたりしたときに這い上がって来たりしなけりゃならない。だから、この施設をね、で、学校に行かれんでしょ、船が出るときは。だから、この施設をね、造って子供

を預けて、子供の安全性を考えられて、「親とちょっと離れとるけど、学校行って、1週間ここで生活しなさい」ちゅうことで。

森： あー、そうですか。

中井： はい。親から離れて。

森： 行政の方に訴えて宿舎を造るように。

中井： そこまでは、わたしも知りません。やっぱり、市の、土地は市ですからね、そやから、市に、行政に訴えてそういうことを陳情されたんでしょね、はい。ほいで、ずーっと、牧野さん栄えて、ずーっとあれされた方ですけどね、はい。

森： 石炭商？

中井： 石炭商なんかでしたね。

若宮： 石炭商もそうだけど、主に船、廻船業。

中井： そうですか。

森： ハシケの。

中井： そう、そう、ハシケの、はい。

若宮： 最後は、牧野海運でいった。

中井： 海運ですね。牧野海運ですね。昭和4年です。

森： あー、そうですか。ハシケの話なんですけど、海運会社があればですか、ハシケの登録だとか、傘下にハシケを何台も持っているようなシステムなんですか。

中井： そう。

森： その牧野海運。

中井： 雇われとるから、やっぱりね。

森： ハシケのこう心配するのは当然というか。

中井： そうですね。

森： そういうもんですね。

中井： そうして、日炭の船なんかが着いたときに、こぼれたのを拾ったりとかするんですよ。本船が着いたときは、本船がばーっと、あれを、石炭を流し出すからね。もう、「忙しいときは一晩中寝られん」ちいったですよ。石炭をどんどん積み出して。四国から全港からどんどん来てね、第一海運（港運）と

かあとみんな、日炭の子会社になっとったですもんね。やっぱあ、もの凄く栄えたらしいですよ、はい。銀行なんかでも凄かったらしいですけどね。もう、日炭が潰れる、板硝子が潰れる、若松もう駄目ですね、今。だいぶね。

森：忙しいときは、46年頃は違うかも知れませんが、必ず土曜日に来れるんですか、そのこっちに連れに来て、日曜日に帰すというのは。

中井：はい。親がよっぽどなんかない限りは必ず帰しよりました、ハシケの子供は。で、親がね、「あしたどっか行かないけんけ、預かってください」ちゅう場合もありますよ。子供にちゃんといいきかせて、「今度、お父さんとお母さんと土曜日にね、どっか行かないけんて、なんかあったらうけ、だから、こんだは帰らんでおんなさい」とか。

森：それもある？

中井：はい、はい。おる、おる。帰船できない子もおります。それはちゃんとした理由で。

安室：反対に親について大阪に行っちゃったりなんかする子なんか、入所されなかったんですか。

中井：そなんの親がどうしても連れて行かないけん場合は、連れて行きますけど。あんまりそういうのは、なかったですね、はい。親も一生懸命働いて、土曜日に連れに帰る。

田上：そうすると、夏休みなんかは、どうするんですか。

中井：もう、全部帰っております。

田上：夏休みのときは、ここにはいない。

中井：いないです、はい。全館。

田上：養護の方とはちょっと違う？

中井：違う。

田上：違いますね。

中井：はい、はい。ほして、学校の登校日があるでしょう、その登校日には帰って来よる。

田上：1日。

中井：はい。そしたら、その日、登校日は午前中でしょ。そしたら、そのまま帰りよりましたね。

田上：なるほど、そうか。そうすると、夏休みとか、長い休みのときはここはずっと静かになるんですね。

中井：はい。もう、全然おりません、ハシケの子供は。家に帰っとります。

田上：ハシケの人たちていうのは、ハシケじゃない人もいるでしょう。

中井：はい。養護施設で。

田上：いや、動力があるものを持ってる親御さんとか。

中井：いや、船の子供だけですよ。

児童ホームの役割

道上：もうこちらが建った時点の、なぜ児童ホームが建ったかということで、父兄の方が120名ぐらいいらっしゃって。そのうち、120人で暮らしてたんですけど、児童が多いので、暁の鐘学園さんに少し行かれて。それで100名お預かりして、ていう感じのことをうかがってまして、はい。

森：そうですか。その100人時代のハシケがいたときなんかの話なんか具体的に聞か聞いて？

道上：ハシケの話というのは、聞いてはいたんですけど。まあ、こう集団で、でも、帰船されてたということですよ。

中井：土曜、日にね、土曜日。

道上：はい。だから、本当にお預かりしてるという感じで、今の養護施設のような感じではまったくなく。まあ、海上で働かれているときに、安全のために児童ホームの方にお預かりして、そちらがお仕事が終わられたら、終わられる週は、土曜に完全に連れて帰られてたという感じでした。

森：そうすると、土曜日に預かって、あっ、日曜日の夕方に。

道上：ええ。

中井：迎えに来て帰られますから。はい、はい。

森：今の話ですと、安全のためというふうにいましたけど、学校教育のためか、安全のためか、どっちなんですか。両方ともですか。

中井：子供の学校ですよ。

道上：大体がわたしが聞いた話では、ほかのその、海運会社の方たちが、お船の方たちが、こう事故に、よく事故に遭われて落ちるっていうか、水の中にですね。

中井：事故でね。

道上：はい。それを見かねて、これではいけないということで、海運会社の方がお金を出し合って、こう造られたというようなことは聞いていました。

森：事故が多かったからね。

道上：多かったっていうか、どれぐらいの頻度かは知らないんですけど、そういうことがあったということで、うかがってはいました。

中井：船で遊びよって落ちて、ガーッて、聞こえないですよ、お父さんたちが石炭をしようときはね。

田上：音も大きいですからね。わたくしの兄の連れ合いも、弟を亡くしてるんです。連れ合いの弟がここで。

中井：それでなった。建てた。

田上：乳飲み子のときはお母さんが負ぶって、あの舳先にね、こう、お父さんが舵を取るっていました。

中井：それと、学校教育ですね。教育できないからですね、やっぱあ。そういう施設じゃないと、子供は親戚かなんかしに預けられんでしょう。

森：学校に行けなくなっちゃう。

中井：はい。だから、それもね。全部。

田上：そしたら、途中で帰ってるときに連絡する

ときは、船だとなかなかできない。ちょっと電話とかないから。

中井：台風が来たとき、電話する。

田上：海運会社へ。

中井：はい、はい。

田上：海運会社に連絡すればもう。

中井：電話通じるところがありましたね、必ず。

田上：海運会社にね。うーん。

中井：連絡を、お父さんが病氣したとか、やれなるとか、事故があったとか、通じるところがありました、連絡先が。

田上：そうすると、子供さんの連絡もそこから？

中井：はい。そうです。

田上：なんか？

中井：なんかがあったときはね。

田上：付きますか。

中井：今みたいに携帯がないけ。

田上：そうですね。

中井：（笑う）携帯便利ですよ。携帯があったら。

森：船だからね。

中井：はい、はい。

田上：それから、まあ、当然。

中井：みなさん苦勞されとるですよ、お父さんも、お母さんも、子供もね。

田上：船の上で生活されてるから。どこから、出身はどこだとか、そういうのは把握されてたんですか。

中井：そんなのファイル見たら分かりますけど。

多いんですよ。若松、たかちゃんたち若松。

道上：若松。

中井：若松でしょうね、やっぱあ。本籍とかは分かりませんが、若松の船やから。

田上：そうですけど。もともとの両親の出身はどこか、どこら辺か？

中井：そんなんはちょっと分かりませんね。

田上：以前は陸の方で生活されてたとかいう訳でも、あんまりそういうことは聞きませんか。それで船にだけにしたとか。

中井： あそこは、わたしたち親と話してないですね、そういう話はね。ここに預かっとなるから、子供のことばかり。

田上： やはり、船の上で生活されているというのが？ 前提で。

中井： はい、はい。

児童ホームの施設

安田： あと毎日のこの日常生活のことなんだけど、子供たちの。まず、部屋とかなんかは、どういうふうになっているんですか。

中井： 海上の子がおるときですか。

安田： ええ。

中井： あれはもう縦割りでしたね。

安田： 縦割り？

中井： はい。横割り、横割りやったかね。

安田： どれくらいの大きさの部屋だった？

中井： 20 畳、なんか広かった、1 つの部屋が。

道上： 20 畳ぐらい。10 人ぐらい。

中井： 10 人は入りよりましたね、1 つ部屋に。縦で、縦になって。横じゃない、縦で。中学生、小学校の小さいのがおって一緒に、一緒に生活しとりました。

安田： そうですか。

中井： 1 年生から中学生まで一緒に何人かずつ固めて入って、そこで、机を、大きな机を出して、勉強みんなでしよりました、はい。おやつもみんなで食べて、はい。

安田： じゃ、勉強も寝るのもそこで。

中井： はい。一緒。

安田： ずらーっと、こう布団を敷いて。

中井： はい、はい。そうですね。

田上： 畳、ベッドじゃなくて、畳。

道上： その時代は。

中井： まだベッドがなかったですね。もうそのあと、昭和 30 年、40 年からね。昭和 4 年からのことやからね、そのころはまだ。

道上： わたしが入った 52 年もベッドはなかった。

中井： まだ、この家ですけ。だから、この家のときは、その代わり頑丈やけ。木は頑丈やったですよ。

安田： じゃ、ちょうどその時代は、ほら、二段ベッドみたいなものが、そろそろ出始める時期ではある。

中井： そうですね、なんか二段ベッドみたいなものちょっと置きましたね、途中で。

道上： それは後からです。

安田： それは後からね。あと、食事？

中井： こたつで、こたつやったですよ、冬は。でも、子供は元気ですから、そうこたつには(笑う)。わっさわっさしてましたね。

田上： その 1 日の。

中井： 食事は食堂で。

田上： 食堂で？

中井： ええ。

安田： ご飯は食堂で食べるんですね。

中井： はい。お風呂はみんな共同で、1 日おきでしたね、その当時。女子が入ったら、あくる日は男子ね、はい。

道上： 今と全然違いますね。

中井： 今と全然もう違う。苦労しとりますよ、その当時の子供も。ほして、石炭で焚きよりました。だから、わたしたちも入るときは、こんなところやった(笑う)、石炭がないから。井戸の水汲んでね、井戸の水で。で、井戸の水が満タンにならんので、途中で一旦ホース入れて、水を足しよりました、夜ずーっとホースで。水道から井戸に水を、井戸水を溜めんとね、井戸水がね、なくなるんですよ。井戸水が湧いてこんのですよ、使い過ぎたら。

児童ホームの食事と行事

安田： 献立表みたいなのが、そういうの残っていないですかね。

道上： なにせ、その 30 何年前ですからね。

中井： 30 年前ちいわんよ、40 年。
道上： 40 年。
安田： はい。ご馳走が出る日てどんな日なんですか。
中井： あのね、お誕生日。
安田： 誕生日ね。
中井： ええ。誕生日はみんなでしよりましたね。
はい、はい。
田上： 毎日のようにないですか、100 何人いれば。
中井： 一斉にやる、食堂で。
田上： あっ、その 1 カ月。
中井： その人の誕生日を。何人かおるでしょう、月の誕生日。それを合同でね、一緒にしよる。それと、卒園、卒園式がある。卒園していく子供のお祝で。児童相談所の方だけが見えよられました、お客さまで。今は、いろいろ学校の先生とか見えられるけど。その当時は、相談所の先生が 1 人、2 人ぐらい見えられよった。はい。それとか、クリスマス会。クリスマス会盛大にしよりましたね。卒園式と、卒園式とお誕生日。
安田： うん。誕生日会ね。例えば、どんなご馳走が出るんですか。
中井： そのとき、巻き寿司とか。
道上： いなり寿司、手作りでなんか。
中井： 手作りでしたよ。そして、海水浴も行きましたよ。お弁当におにぎり、梅干し入れてね。おかずはウィンナーと [] もの、卵焼き、ゆがいた卵。
道上： ゆで卵。
中井： ゆで卵。そしてね、海に行ったらですね、穴を掘ってトイレを造るんですよ。ほして、その回りにね。
田上： 囲って。
中井： 囲うんです、毛布で。そこがトイレ。ほして、車がなんもないでしょう。だから、あそこ岡田商店さんからね、運んでもらうんですよ。岡田商店さんも、やっぱり地域の方に協

力していただいて。岡田商店さん全部その荷物を運んでくれるんですよ。わたし中高生、高校生はおりませんでした。まだ、高校は行かせてなかったから。中学までですよ。その子たちがね、飛んで来るんですよ、「スイカないかな」。その砂が熱いでしょう。「熱っ、熱っ」て火傷しよる（笑う）。それで、岡田商店さんがね。

道上： その時代から。
中井： うん。岡田商店さんからお世話になっとなるんですよ。
田上： 岡田商店は、この近くなんですか。
中井： 近くです。
道上： その坂から降りたところ。
中井： 牧野さんの家の前ですよ。
田上： 牧野さん。
道上： 駐車場になってる。
中井： 牧野さん、そのころ、ここあれされてたからですね。だから、牧野さんのあれでな、近所の方が全部ね、協力していただいておりますよ。牧野さんのお陰で、はい。
安室： 先生方は、通いがほとんどだったんですか。
中井： 住み込みです。
安室： 住み込みですか、みなさん。
中井： はい。
安室： はあー。
中井： わたしが入ったときから住み込みはない。当時は住み込みでしたけど、わたしは住み込みなくしたんですけどね。それまでも、まだ、だいたい 10 年ぐらい。
道上： わたしのときは、全員。
中井： みどりさん住んでなかった？
道上： 住み込んでなかったです。
中井： 住み込んでいなかった。そうか、先生はあれやね、だいたい住み込んでですね、住み込んでいましたよ、職員が。ほして、二交代。
安室： ほう。じゃ、もう子供たちと一緒に寝起きして？

中井： いや、保護室でちゃんと。保護室がありましたからね。勤務を上がったら、自分の部屋へ帰る。

田上： 1日のタイムスケジュールみたいなのは、大体朝おなじに起きて、例えば、食事なんかでも、中学生は遅く帰ってくるとか、部活をやるとか。

中井： いや、そのころ部活はなかった。

田上： なかった。そうすると、夕食はみんなで一緒にそろって。と、朝もう。

中井： 今はずーっとひらけてきて療護施設になったから、部活とかいろいろ取り入れますけど、昔はきちっと時間内にきちっと。そして、朝ね、まだ貧しかったからですね、施設も。だから、もう、朝、夜5時にご飯を食べて。

田上： 夜5時に？

中井： はい。そして、それから7時におやつで、みんな一斉におやつですよ。それから、なんにも食べるものはない訳ですよ。はい。だからね、男の子はもう腹がすいてね、腹がグー、グーいうてね。「たまらん。寝られん」とかちゅうて、だから、わたしも悪かったけれど、こそつとね、おにぎり作ってね、ちょっと、「あんただけよ」とかいって、食べさせよった。「寝られん」ちゅうんですよ（全員笑う）。

田上： 育ち盛りで。

中井： なんかやろうにもね、施設にないんですよ、やっぱあもうね、その当時は（笑う）。そういうこと、しなかったですね、みなさん。

田上： じゃ、朝食が学校行くから7時ごろですか、朝。

中井： はい。朝7時。7時起床です。

田上： それで、朝食は？

中井： 7時半でしょう。それから学校に行きますもんね、みなさん。

田上： そうか。でも、中学校だと遠いでしょう。

中井： 中学校は高塔中学校です。

田上： 四中はなかったですか。

中井： いえ、ないです。そこの高塔中学です、みなさん。

田上： じゃ、20分ぐらいかかる。

中井： はい、そうですね。

田上： で、昼は、給食。

中井： 石峯の方は行ってないですよ。中学は行ってない。全部、高塔中学。

田上： そうですか。で、就寝がもう。

中井： 9時です。就寝は9時。

田上： いろんな問題とかはない？ 怪我とか喧嘩とか（笑う）。

中井： ありましたよ、そんなもん、もう、そんなんでおおごとやったですよ。